
東方白翼記

高坂 憂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方白翼記

【Nコード】

N4214BA

【作者名】

高坂 憂

【あらすじ】

突然、神の手により好きなキャラクターの体に転生させられた主人公。そのキャラの登場しない世界だと気づきどう生きていくのか。

プロローグ(前書き)

初投稿です。よろしくお願ひします。

プロローグ

「はぁ・・・退屈だな・・・」

彼は、最近の生活に満足していない。子供の頃は、夢や希望に満ち溢れていたが今ではそんなものが“現実”ではありえないものだと気付かされてしまい、つまらない惰性でダラダラとした生活を送っている。

一応大学は出たが、その後就職先が見つからずふてくされていたら半ば勘当気味に家から両親に追い出される始末、本当に救いのない人生である。

そんな彼の楽しみといえば、週刊誌で連載している漫画のコミックスが出るたびに買い込み、それを読む事とその世界に自分が行ったらなどといった中学生が考えそうなことを妄想するのが楽しみであり、日課となっている。

「・・・なんか、面白いことないかなあ・・・」

なんで、俺がこんなつまらない世界で生きなくちゃならないんだ、どこぞの野菜少年の世界や隙間妖怪がいる世界、王様がカードで戦う世界とかに生まれたかった。

そして、野菜少年の世界の妖怪のハーフの女の子と、いちやいやしたり隙間のところで蓬萊人の女の子とラブラブしたいなあ・・・

・・・話は聞かせてもらったよ、君の望みをかなえてあげようじやないか・・・

「つつつなんだつつ!!?どこからこえが聞こえてやがるんだ!？」

まあ、気にしない、気にしない・・・とりあえず今は寝ててよ・・・

そんな声が頭に響いたかとおもうと、彼の意識は闇に沈んでいった。

第1話と11話のプロローグその2（前書き）

こちらがメインのプロローグになります。

第1話という名のプロローグその2

ぞわ……ぞああ……

「んー？……よく寝た……？」

まてまてまてまて！？いま俺の声がやけに高くなかったか？おれの声は確かバスの域に入るか入らないかくらいの声だったはず、だがいま俺の口から聞こえてきたのはどう考えてもアルト、下手をすればソプラノくらいの声だったぞ！！？

「しかも、ここはどこだ！？」

さっきまで K にいたのにどこを見ても、木、木、木である。

「……木しかねえ、完全に森の中じゃねえか……」

……パラ……ヒラヒラヒラ……

ん？紙が降ってきた、これは……手紙？

やあ、これを見ているということは目覚めたようだね。早速だが君には違う世界に転生してもらった。まあ、いわゆるテンプレってやつだねwww……君の望みをすべてかなえたかったんだが、実は失敗してしまっただよ。そのせいで君の姿は、君の大好きな漫画のヒロインのものとなっている。……よかつたねb

「……よかつたねbじゃないわあああああつ！！！！というか、そもそも好きなヒロインなんてたくさんいるんだが……」

まあ、あれだ・・・そのお詫びにだがそのヒロインのつかう武術と、そのための武器を君に用意してある。そしてそれを扱う知識もねww才能や戦闘センスはヒロインのものと変わらないが、君を送った世界にふさわしい能力を付加してある上に、気と魔力そしてその世界に存在している妖力を鍛えた分だけ増える体にしてあるから、そうそう負けることはないはずだよww

まあ、当然だろう、そのくらいはしてもらわないとこちらとしても納得がいかないからな。

能力はそのうち目覚めるとおもうから頑張つてねb・・・応援してるよwww

追伸、その体は君が心の底から死にたいと思わない限り死ねないようになつてるからね、年もとらないようにしてあるけど鍛えた分は成長するから頑張つてねノシシ

「結局、だれの姿になつているのか書いてねえじゃねえか!!」

これでは、なんと名乗ればいいのかわからない上にどんな武術を使えるようになっていのかわからない、見たところ周囲に 奴 が用意したという武器とやらも見当たらない。

とりあえず、今は川を探そう、そこで自分の顔を確認して武器も探さなければならぬ。幸い近くから川のせせらぎの様な音が聞こえているから、音のしている方向へ向かえばいいだろう。

森の中を少し歩くと、川が見えてきた、急いで河辺により覗き込むと、そこに映っていたのは、黒い髪をサイドポニーにしている真つ

白い肌をした美少女が映っていた、その顔はどう見ても、俺が愛してやまない魔法 生ネギ ! という漫画のヒロイン桜咲刹那の顔だった。

「……はあ？……まさかの、刹那か……」

ということとは、武器は夕凧、もしくは建御雷ということになるな、この世界がどんな世界かもわからない今、急いで探さなければ命が危ない。

「はあ……いったいどこに、武器があるっていつんだ？」

現在の自分の装備は、ネギ ! の中で刹那が幻想空間の中で着ていた、背中が大きく開いた烏族の戦闘衣装のみである。こんな時に限って敵が現れたりするのがテンプレであるからして早く、自分の身を守るための武器を見つけなければならない。

……ガサ……ガササササ……

「あー、今の思考は、フラグだったか!？」

川の向こう側の茂みの中で何かうごめいているようだ、自分の知る肉食動物や、未知なる化け物でなければ問題ないが、そういった類のものだった場合、絶体絶命のピンチになってしまう。願わくば敵になりうるものでないことを祈りながら茂みの中から 出てくるのを待つ。

「……グルル……ガアアアアアアアアアアアッ!……」

願いは届かず、化け物の類であったようである。 それ はどう小

さく見積もつても体の全長が4m以上ある上に下半身が蜘蛛の体をしていて、上半身が牛の様な見た目をしている漫画などで時々登場する分かり易い妖怪の典型のような姿をしていたのである。しかもその妖怪はどう考えてもこちらを捕食対象としてしか見ていないような眼をしている上によほど腹がすいていたのか、ありえない量の涎を垂らしているではないか。

「っはあああ!!?いきなりこんなんが出てくのかよ!?!無理無理無理無理!!?」

こんなん武器があつたとしても勝てるわけない、そう思い逃走を選択し妖怪が出てきたのとは反対側の茂みに飛び込んだ。本来の自分の体ではない桜咲刹那の体であるが故に元々の自分の体との差異に戸惑いながらも森の中を走っていく。その際、元々の体の時よりも圧倒的に早く動いている体に対しさすが、せつちゃんの体だと感心したり元々の自分の貧弱さに嘆いたりして現実逃避している。しかし一向に距離を離すことができずつかず離れずの位置をものすごいスピードで追いかけてくる妖怪から逃げるための逆転の手段がないものかと考えてみれば気付いたら森を抜けだしていた。しかし森を抜けだしたといつてもそこは、崖の上であるどうしたものか?

「・・・やつちまつたぜ・・・orz、ここからじゃどうあがいても逃げられないぜ、転生から数時間でDEAD・ENDなんていやすぎる・・・」

崖の上で立ち往生していると自分が来た森から先ほどの妖怪の雄叫びの様なものが聞こえる。

「・・・チツ!・・・もう追いついてきやがったか?」

「ウヲオオオオオオオオツ！飛べ！飛ぶんだ俺　　！はば
たけ　　俺の翼　　キヤアアアアアアアああつ！」

バサア！！　　パタパタパタ

この体にふさわしいような女の子っぽい悲鳴をあげたものの、見事に翼を使い飛ぶことに成功したようだ。とりあえず、今はこの感覚を忘れないように飛んでいようと思う。

しかし、こうやって念じることによって翼をだし飛ぶことができたということは、念じれば夕風などが手元に現れる可能性がある、試みに夕風もしくは建御雷がこの手に現れるよう念じてみる、すると手元に夕風が出現しその手に握られていた。

「　　これで武器の出し方もわかった　　後は、使いこなせるように要修行といったところだな。」

後は、この世界の特有の能力なんだが、これについてはそのうち目覚めると　手紙　に書いてあったため、今は気にしなくてもいいだろう。能力がこの世界特有のものであるため、これがわかればこの世界がどんな世界か判明するだろう。

「とりあえず、人のいるところを探さないと　　」

現在、俺は見知らぬ地に一人きりだ。このままでは、野垂れ死んでしまう可能性が大のため、なるべく早く人の住んでいる場所を見つける必要がある、そう思い純白の翼をはためかせ太陽の出ている方向へはばたいていったのだった。

第2話・世界判明（前書き）

今回もよろしくお願いします。

第2話：世界判明

とりあえず、人のいる場所目指して飛んでいた俺だが3時間ほど飛んだところで疲れてしまい少しの間休息をとることにした。今は山の中で流れている川のほとりで羽を休め休息をしている。

「その人間！！即刻にこの山から立ち去れッ！！！」

川で水を飲みながら休んでいると、そんな叫び声が自分の頭上から聞こえてきた。初めて言葉を話す生き物に出会えた喜びとなぜ頭上から聞こえるのか？という疑問を持ちながらそちらを見上げるとそこに居たのは、自分がネットの動画や画像などでよく知っているゲームのキャラクターがそこに存在していた。

犬走 椀 俺が見上げた場所にいたのは自分はプレイしたことはないがそのタイトルや関連商品などをよく知っている 東方プロジェクト という弾幕シューティングゲームで登場する白狼天狗と呼ばれる種族の女の子だった。

「一応、私はこれでも妖怪の血を引いているんですが？」

今のこの身は半人半妖の桜咲刹那のものである。そのため、こう返すのは間違いではないと思う。一応、証拠として翼を展開しておいたほうがいいのかもしれないため翼を展開しようかと思ひ背中に力を込めながらその少女 犬走 椀 から目をそらさないようにしていた。

バサッ

フワ

フワ

「・・・純白の翼・・・烏天狗？」

一応、妖怪だということは分かってもらえたようだが俺が何の妖怪か悩んでいるようだ。翼の形などから判断すると、烏天狗 なんだろうが烏天狗はその名の通り烏と同じ黒い翼のはずだからな。

「いえ、私は人間の血も引いているため純粋な烏族ではないですよ。私の名前は桜咲刹那、あなたはなんというのですか？」

とりあえず自分のことを説明するために、この体が、どういったものかを言っておく。多分ここは 妖怪の山 だと思われる。椛に自己紹介をして何とかここに少しの間でもいいから住まわしてもらえたらと思う。椛の方を見ていると椛は人間だと思っていたものが半人半妖だとは思っていなかったらしく、口を開けポカーンとしていた。

「・・・ハッ！・・・私の名前は、犬走 椛です・・・刹那さん、あなたは何の目的があつてここにきたのですか？」

目的も何も気づいたらこの世界に居て、気付いたらこの体になっていて、唐突に妖怪に襲われて逃げてきたらここにいたのだから答えようがない。

「いえ、特に目的はないですよ。恥ずかしながら私はそんなに強くなくて、ほかの妖怪と戦闘になりそうだったから逃げてきただけです。」

とりあえずこんなことを言ってみたが、俺はまだこの体の力を理解していないからあながち間違つてはいないと思う。しかし、このま

まではいろいろとぼろが出てしまうから何かしらそれっぽい設定を
考えなければ。

「それだけ妖力があって弱いということは考えられません。
はっきりと目的を話してください！」

あーやばい、疑われてるな。それにしてもこの体、妖力が多いのか
知らなかった。なんとか誤解を解かなくては。とりあえず原作の刹
那の設定を使おう、そうしよう、それがいい。

「実は、半妖であるため生まれた村で、村八分にされてしまいつい
この間追い出されてしまったんです。それで、完全な妖怪である父
が昔くらしていた妖怪たちが住んでいる場所があると聞いて旅をし
ていたんです。旅をしていたのはいいものの、今まで戦いとは無縁
の生活を送っていたせいか妖怪が出てきて思わず逃げてしまっ
たんです。」

刹那の設定を使うつもりがほとんど捏造になってしまった。だがこ
の説明で誤解が解けるはずだ。

「そうですか、にわかには信じられませんがとりあえず、天魔
様のところに連行させていただきませう。」

あれ！？誤解が解けてないじゃないか！なぜだ？あんなにも完璧な
捏造設定だというのに。どうしよう？とりあえず俺は天魔とかいう
人？妖怪？のところに連れて行かれるらしい、俺は飛んでついてい
けばいいのだろうか？

一応、逃げているときに飛ぶのには慣れたからいいものの、さつき
のこの世界に来たばかりの時だったら翼も出せずに強制退出させら
れていたんだろな。

「飛んでついていけばいいですか？ 椛さん？」

とりあえず、確認してみることにする。

「ええ、私に飛んでついてきてください。あなたは、半妖ということなのでゆっくり飛びますから遅れないようにしてください。」

ん？ ゆっくり飛んでくれるとは優しいなこの子は、椛というキャラについて俺はほとんど知らないからなあ、こんな性格だったとは思わなかったぜ。そんな子に嘘をつく形になってしまつとは、一生の不覚……

「わかりました、すみませんご迷惑をおかけします。私もまだ飛ぶのに慣れていないのでありがたいです。」

しかし、ここが東方の世界だということは分かったが時系列的には今どのあたりなのだろうか？ もう、原作の異変は終わっているのだろうか？ それともまだ幻想郷すらできていないのだろうか？ 前者であれば、俺は新たな異変が起こらない限りは平和に暮らすことができる。しかし、後者であれば強くなければ幻想郷ができる前に殺されてしまう可能性があるのだ。幻想郷のできる前であれば、スperlカードルールなど存在するわけもなく敵対したものは、非殺傷の弾幕など打たず殺す気で力を込めた弾幕を放ってくるだろう。今の自分がするべきことは一刻も早く強くなることだな、前者であれば後者であれ強いことに越したことはないからな。

「すみません、椛さん今から行く天魔様というのはどういった方なのですか？」

とりあえず、少しでも生き残る確率が上がるよう今のうちに情報収集でもしておくことにしよう。

「え？ああ、天魔様ですか？優しい方ですよ。半妖であるあなたにもある程度の選択肢をくださると思いますよ。」

え？選択肢って何さ？助けしてくれるとかそういうわけじゃないのか。だがしかし、ここでなんとか住処とかを手に入れて強くなるための修行をつけてくれる人を探さなければ。あと能力と武器を手に入れなければ、奴の話によると俺には何かの能力があるらしい上に、もらえるはずの武器が俺の手元にはないからな。

とりあえず天魔様？のところについて話をして住処を獲得しなければ。獲得できたら、武器の発見と能力開発をかねて修行だな。そんなことを考えながら木々の間を飛んで行ったのだった。

第2話・世界判明（後書き）

短いです。

第3話：天魔（前書き）

今回、かなりグダグダしてます。

第3話：天魔

俺は、椛に連れられて山の木々の間をゆっくりとだが飛んでいく、これから天魔という妖怪に会うことになるらしい。先ほど俺は半妖であることを話したが、原作の刹那のように純白の翼が禁忌とされている場合を考えていなかった。

もしも、原作のネギ！のように、この純白の翼が禁忌とされていた場合、命だけは助けてもらえるように交渉しなければ。

「もうすぐ着きますよ。くれぐれも粗相のないようにお願いしますね。」

椛が俺にそんな忠告をしてくる。自分の命がかかっているかもしれないのだ、粗相なんてしないように気を付けなければ。

「は、はい！頑張ります！」

さすがに緊張するな、できれば此処で暮らせるようになるのがベストかもしれない。そして、ある程度実力が付いたら旅にでて世界を見るのもいいかもしれない。どうやら着いたようだ、これから暮らしていくかもしれないところの長に会うのだ、気合を入れていかなければ。

「刹那さん、着きましたよ。天魔様！麓をうるうるしていた半妖を連行してきました。どうも住むところが無い様なので会っていただけませんか？」

椛が山の中腹にあった大きい木を見上げるようにして声を張り上げている。どうやら天魔様？は、ここに住んでいるようだ。椛の名前

が日本名だったため日本家屋のようなものを想像していたが、まさか木の上に住んでいるとは思わなかった。

ザワ　　ザワワ　　バサバサ

何かがはばたく音とともに、木の上から何者かが降りてくる。

「フム？犬走よ、その者が侵入者か？」

空から降りてきた天魔と思われる男が椀にそう質問した。

「ハイ、天魔様この者が、我らが領地である　妖怪の山の麓付近を、うろろろしていたので連行しました。」

椀が簡単に俺のことを天魔様？に報告している。

「ほう？貴様、この　妖怪の山　に一人で忍び込むとはいいい度胸だな。今でこそ都に戦争を仕掛けていていないが、普段は鬼もいるこの山に忍び込むなどというのは、よっぼどの馬鹿か、自殺志願者の人間くらいのはずなのだがなあ。」

え？そんなに危険な所だったのか此処は！？確かに原作でも　妖怪の山　は、排他的な場所みたいな設定があつたがそこまで危険な場所だとは思わなかったんだがなあ。

「まず、私の名前は桜咲刹那といいます。このたびは、この　妖怪の山　に忍び込む形になってしまい申し訳ありませんでした。もともと住んでいた場所を失い新たな住処を探していたら妖怪に追われ、入り込んでしまったんです。もしよろしければ、少しの間だけこちらに住まわしてもらえないでしょうか？」

とりあえず、この山に入ってしまったことのお詫びと、こちらに住みたいという要望を言ってみた。住処の獲得は現在の急務だからな、サバイバル生活などしたことのない自分では、野宿など1時間も持たない自信がある。

「住みたいというのは分かったが、まず貴様は何の半妖なんなのだ？それを、聞かないことには許可を出すわけにはいかないのだが。」

あれ？椀、俺が何の半妖か説明してくれなかったのか？そんなことを思いながら椀の方を見ると椀は目をそらして少し冷や汗を？いていた。

あー、椀ちゃんわすれてたのね

「は、はい！今何の半妖かわかるようにしますね。」

俺はそう言い翼を出すために集中した。

パサ　　パタパタパタ

よし、最初の時よりは早く翼を出すことができたぞ！

「まさか、烏天狗とは。しかも、強い力を持つとされる白い翼をもっているとは。」

天魔様はそんな事を言いながら、俺と俺の翼を見ている。禁忌とはされてなかったようだが、この世界では白い翼はそんな意味があったとは。とりあえず俺はここに住めるのか？

「で、では、私はここに住むことができるのですか？」

俺は、住処が見つけれられたかもしれない、そんな希望を胸に抱き天魔様に質問した。

「フム、いいだろうここに住むといい。して、貴様は何ができるのかね？いや、どんな力を持っているのだ？」

やった！ここに住んでもいいようだ。だが天魔様は俺がどんな力を持っているのか？と聞いてきている。しかし、俺はまだこの世界に来てから一日もたっていないせいか自分にどんな力があるのか、そして自分の武器すら見つけることができている。

「い、いえ実は、私はまだ翼を出して飛ぶくらいしかできないのです。今まで、戦いのない所で生きていたせいか自分に何かの能力があるのは分かっているのですが、まだその能力がどんなものかさえわかっていません。」

ここは、正直に自分がまだ能力に目覚めていないことを言うしかない。

「フム、まだ貴様は何も能力に目覚めておらず、戦う力を持っていないのだな？ならば、此処に住むのはいいが7日間だ、7日間以内に力を身に着けることができなければ出て行ってもらおう。」

なん・・・だと？7日間、要するに1週間以内に武器と能力を手に入れなければ異世界生活が始まってすぐにサバイバル生活を送らなければならぬということか！？

「わ、わかりました、とりあえず7日間はどこで暮らせばいいので

しょうか？」

ここは、仕方がない7日間の宿を手に入れたと考えるしかない。とりあえず、7日間どこに住めばいいのかを聞かなければ。

「決まりだな、よし犬走よ、射命丸を呼べ。奴に“刹那”の世話をさせる。奴なら“刹那”と同じ烏天狗だからな。」

ん？俺はパラッチ天狗と一緒に住むのか？そして、初めて天魔様が名前で呼んでくれたな、ずっと貴様と呼ばれていたから少しいいな。

「は！ただちに呼んでまいります！」

椛はそう言い飛び去って行った。

「さて、刹那、君に一つ助言をしてやろう。能力というのは、自分を見つめ直せばおのずと心に浮かんでくるものだ。7日間それを念頭に置いて鍛えるといい。」

天魔様はそう一言、助言をしてくれた。

そうか、自分を見つめ直す？自分はいったい何なんだ？この体は確かに“桜咲刹那”のモノと同一のモノだがその中にある心は現代を生きていた俺のモノだ。そのところにもうまく折り合いをつけなければ能力は目覚めないのかもしれないな。

「天魔様あつ！お呼びですかー？」

先ほど椛が飛び去った方向から椛のモノとは違う声が聞こえる。

「おや？来たようだ。射命丸よ、今日から7日間この者の世話をしなさい。まあ、世話といっても射命丸の家に泊めてやるだけでいいがな。」

天魔様が射命丸に俺のことを伝えている。

「あやややや、別にかまいませんがどちら様ですか？」

あ！天魔様、俺が泊まることは伝えてくれたが、俺が誰なのかは伝えてくれていないじゃないか。

「は、初めまして、私は、桜咲刹那といいます。7日間の間よろしく願います。」

円滑な人間？妖怪関係は自己紹介からだ！ということ、俺は射命丸に自分の名前を説明した。

「あやややや、これはこれは、ご丁寧には射命丸文と申します。短い間ですがよろしく願います。」

そう、射命丸は丁寧にあいさつを返してきた。

「では、私の家に行きましょうか。今日は、もうご飯はたべましたか？」

射命丸って原作でこんなキャラだっけ！？こんな優しいキャラじゃなかった気がする。

「食べてなければ、ご飯を食べてから今日はもう寝ましょう。疲れ

まぶしい、射命丸がまぶしいぞ！俺には直視できない。

「は、はい、まだ食べていません。何から何までありがとうございます。」

俺がそういうと射命丸は行きましよう、言わんばかりに翼を広げ空に浮かび上がった。俺はそれにおいて行かれないように急いで翼を広げた。

「でわ、行きますよ！はぐれないようついてきてくださいね。」

射命丸は素晴らしい先ほど飛んできた方向へ飛んでいく。俺は、それに追いつくよう追いかけて行ったのだった。

第3話・天魔（後書き）

もっとしっかり取りまとめられるようになりたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4214ba/>

東方白翼記

2012年1月14日01時51分発行